

## 第 73 回 GAORA 番組審議会記録(2021 年 6 月開催)

第 73 回番組審議会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、書面による開催としました。今回は「みらいストーリー ～ジュニアゴルファーの挑戦～」について審議を行い、委員の皆様から次のようなご意見をいただきました。

### 番組審議

#### <番組概要>

多くのプロゴルファーが輩出する沖縄県。「世界で活躍するプロを育成する仕組みをつくりたい」という地元の想いに賛同し、創業 130 年を数える老舗企業がジュニア選手の支援をしている。この支援を受け、プロという未来図を描き、汗を流すジュニア選手たち。彼女たちが、沖縄県で行われる女子プロゴルフ開幕戦「ダイキンオーキッドレディスゴルフトーナメント」への出場権が与えられるジュニア予選会に挑む。

#### <委員長総括>

■本番組には、すべての委員が高い評価を寄せている。プロを目指す若い彼女たちの友情、ひたむきな姿、喜び、口惜しさ、強さ、不屈の姿を素直に描き出した好番組であった。また、番組中のナレーションについても好評価を得ている。

なぜ沖縄が多くのプロゴルファーを輩出するのかについては、それを知ることもまた異なった視点から意味があると感じた。老舗企業によるジュニア選手たちへの支援、企業の CSR 活動がもたらすものについては、1 時間の放送尺の中では十分に表現しきれなかったことは否めない。選手たちの技術的な側面や練習プログラム、指導方法などゴルフのテクニカルな側面を加えることを求める意見もみられた。確かにそれ自体はゴルフというスポーツをみる視点からは意味のあることであるが、本番組の制作意図からすると、それらを番組中に組み入れることは、かえって番組の焦点をぼかすことになるのではないかと私には思われた。

「美女ゴルファー」という表現への指摘に対しては種々意見もあろうが、日本のスポーツ界の後進性の一面を言い当てているように感じられる。スポーツの社会的なポジションを高め、社会への貢献を果たすためにも、常に意識することが必要なことではないだろうか。

このように、本番組に対して、各審議委員からさまざまな意見が寄せられたが、それらは、本番組が好番組であったことから、今後のスポーツドキュメンタリー番組への期待の表れであるとも考えられ、総じて、本番組は好評価に値するものであった。

<審議意見>委員の主な意見は次の通り。

■丁寧な作りで、ゴルフに興味のある視聴者はもちろん、ほぼルールさえ分からない視聴者にとっても魅力ある番組になっていたと思う。スポーツドキュメンタリー的な要素に加え、エンターテインメントとしても十二分に楽しめた。それぞれの選手の追い方に工夫が見られたが、私は比嘉里緒菜選手にもっとも心が動いた。最終的に予選大会を突破できなかったことで、その感動が大きかったように思う。悔しさをにじませながら、凛々しくインタビューに答える姿に、力をもらった視聴者が多かったはずだ。話したくない時に話すことで、それをメディアが伝え、時に深く響くことがあるものだと最後のインタビューを見て再確認した。

- 子供達が一生懸命に目標に向かってチャレンジしている姿はどれも輝き、無条件に応援したくなる。プロのひのき舞台での活躍を夢見る、しかも多くのプロが育った沖縄の女子ゴルファーに焦点をあてた番組で興味深く視聴できた。大会で競り合う一打の緊迫した映像で臨場感が味わえた。彼女たちが夢に向かってひたむきに取り組む姿は視聴者に伝わったと思う。ただ、プロ顔負けのプレーで本線への出場権を争う映像に比べて、肝心な本選の映像や解説が少なかったのは残念だった。プレーについてもプロで活躍している同年代の選手との違いや、制作意図にある沖縄のジュニアが抱える問題をもっと具体的に説明しても良かったのではないか。
- プロゴルファーになるのは、ごく一部の選ばれた者なのだと改めて感じた。そのためには、幼少時代から家族も協力しながら二人三脚で、いかに努力が必要なのかを知ることができた。プロに挑戦するための登竜門ともいえるアマチュアゴルフ選手権に向けて、メンバーの姿勢と、各人の意気込みがよく表現されていた。試合中の心理状態なども感じることができ、持っている力を常に発揮するのがいかに難しいかを感じさせられた。最後に今回のナレーションは、非常に聞いていて心地よく、番組に合っていた。非常に心に残るドキュメンタリー番組であった。
- 全体的に軽いタッチで流れるように見やすい番組であったと感じた。みらいゴルフのメンバーは、まんべんなく紹介されていて、インタビューもナレーターも必要な情報等はコンパクトに伝えられていた。他方で、制作意図にある企業の CSR 活動がもたらすものを伝えるには、老舗企業を支援へと動かすものは何か、支援者に対してもう少し深いインタビューが聞きたかった。また、各選手がどうしてゴルフを選びプロゴルファーを目指したのか、どういう条件がそろって若いうちにそのような選択をするに至ったのか、を掘り下げてもらえれば、選手が背負うものや意気込みが更に伝わったのではないか。
- ジュニア時代には大きな戦績を残しながら、プロへの移行が上手いかず、挫折する選手は数多く存在する。トップジュニアからプロへの移行というプロスポーツ界にとっては一番難しい年齢の選手に注目した点が非常に興味深かった。アマチュアとプロの差は主にメンタル面で、皆が想像するより遥かに大きな差がある。こればかりは本人たちが経験して学び、それを上手く活かした選手のみがプロとしての道を開拓することができる。プロを目指す選手にとっては、実際にプロトーナメントに出場するチャンスを得る事が出来るかもしれない経験は非常に大きく、また必要不可欠な経験である。番組では、ナレーターが若々しい女性の声ではつらつとしたテンポであったことと字幕スーパーが見やすい色であったことが選手の年齢層と合致してとても良かった。1点違和感があったのは、選手を紹介するタイミングがまちまちで、どの選手を追えば良いのかが掴めず、1人か2人に絞ったほうが見やすかったかもしれないと感じた。
- 数年前、女子アスリートを迎えてのシンポジウムを主宰した際、ある女性研究者から「弱いもの、小さいものが無理をしてでも頑張っている様子」というとらえ方を女性にするときにジェンダーバイアスが入っているという指摘があった。「親の目」をもっていけばまた違うのにと感じたことを思い出した。10代の子供たちが夢に向かって頑張っている姿は、まさに「健気」でそれだけで絵になる。そして、そうした夢をサポートする本来の意味での「スポンサー」がいることを紹介したことも意義があった。

ただ、そのことに「依存」し過ぎたきらいがあったことも否めない。一つは、彼女たちの技術的な側面や特徴、能力面の成長過程などを専門家がコメントすれば、スポーツチャンネルの面目躍如となったのではないか。さらに、番組間の別番組宣伝で「美女プロゴルファー」という表現が使用されていたが、スポーツチャンネルにはふさわしいものではないと思えた。世界のスポーツの潮流はかなり先を行っている気がする。そうした評価は見るものに任せて、スポーツの魅力を表現する言葉を工夫されることを望む。

GAORA では、これらの貴重なご意見を、これからもより良い番組をお届けしていくために大いに活用させていただきます。

[審議委員]

種子田穰委員長、影山貴彦副委員長、黒田勇委員、藤井純一委員、沢松奈生子委員、森本志磨子委員、山本泰博委員（以上7名）

以上